

保育カンファレンスの検討（その2）

—保育実践研究としてのカンファレンスの検討—

○田代和美（お茶の水女子大学）・榊田正子・田中三保子・吉岡晶子・伊集院理子・

上坂元絵里・高橋陽子・尾形節子・田中都慈子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

問題

近年、保育カンファレンスの必要性が森上氏らによって指摘され、またその有効性に関する具体的な研究も行われている（平山 1995）。筆者は昨年度の発表（「保育カンファレンスの機能についての一考察」）でカンファレンスが有効に機能するためには発言の対等性、話の具体性、循環性が必要であると述べた。この点に関しては、本園のカンファレンスでも課題として考えていた。今回は、本園における約2年間のカンファレンスの経過を踏まえて、保育カンファレンスが実践研究に位置づくか否かを実証的に検討することを目的とした。

94年度の1学期からの話し合いの中で顕著に現れたのは、多くの（特に若手の）保育者が、子どもを受け止めたいと思っはいても、子どもの気持ちを理解しきれないというジレンマを持っていることと、それに対して研究主任の保育者が子どもに対する自分の感じ方、理解の仕方を話すという構図であった。保育者の抱える悩みの多くが子どもを受け止められないことにあったため、気になる子どもを巡る話し合いは、研究主任の保育者が、共感性の高さの必要性や自分の子どもに対する対応の仕方を話すという事を繰り返して進んでいった。

事例1 1994年9月19日のカンファレンス

友達にとけ込めないY子を巡る話し合いは「心配な人」という話題提起から始まった。研究主任の保育者は、それまでと同様にY子の内面の理解やそれへの対応について繰り返し話した。しかしそれに対して若手から「あんまり分析的になっても実りがあると思えない」という反論がでた。またあるメンバーから「気になる子を受け止めてあげなくちゃいけないと思うと、かえって受け止められない」ことが語られ、それに同意するメンバーがでた。その後「受け止める」という言葉を巡ってのベテラン保育者と他のメンバーとのやりとりが続き、また「この話し合いは受け止めなくちゃとか、もっと頑張らなくちゃと思って終ることが多く、保育に返らない」ことや「話合った後に楽になっていることも大切ではないか」という話し合いそのものに対する発言も出た後、話は保育観の違いにまで至ってしまった。

この事例1までのカンファレンスでは、子どもを窓口にして、それぞれの保育者の保育観・方法論の違いが浮き彫りになっていった。その理由は、それぞれ独立ではないが、話題提供者の要因として、問題意識が

不明瞭であること。記録がないため話が抽象的になること。他のメンバーの要因として、話題提供者の問題にフィードバックしないこと。カンファレンス運営上の要因として、発言における対等性がないこと。実践して改めて話し合う循環性がないことなどが挙げられる。しかしその後、これらの要因は、それぞれ関与し合いながら改善されていった。話題提供者の要因に関しては、95年度から記録を提示し、それぞれの問題意識に沿って話し合うことになった。他のメンバーの要因に関しては、自分の話題の際のテープを聞き返し、その話し合いが自分にとってどんな意味があったのかを振り返る機会を持った。それによって、自分たちの話は流れやすいことを自覚し、話題提供者の問題意識の明確さの必要性も確認した。それ以後、話が流れないように意識するようになった。カンファレンス運営上の要因の対等性に関しては、研究主任の保育者の変化の影響が大きかった。Y子のカンファレンス以降、方法を意識的に変え、雰囲気を変えたことで、他のメンバーが話やすくなっていったものの、本質的には分からせてあげたいという立場での発言をしていた。しかし95年の2学期にある話題提供者の2回目のカンファレンスにおいて、話題提供者が自分の根拠を話すのを聞く中で、保育者それぞれの捉えやかかわりがあることを実感として分かったという。それ以後、他の保育者の捉えやかかわりを分かりたいという気持ちでの発言に変わり、それぞれの保育者の問題意識に、より焦点が当たる話し合いになっていった。循環性に関しては95年度は、各々の保育者が自分の問題意識に基づき、実践→記録1→話し合い→テープおこし→実践→記録2（同じテーマ）→話し合い→実践という循環を経た。

事例2 1995年12月1日のカンファレンス

話題提供者からH男を中心とするある1日の実践記録が出され、記録を説明しながらH男のわからなさや自分に「もやもやした」部分があることが語られた。それに対して他の保育者たちは、自分なりの解釈を提示した。それに対して話題提供者からは他のメンバーの解釈に対して「私かもやもやしているのはそういうことじゃない」と具体的な場面に即した話が続き、その中でH男に対するわからなさ、信頼関係への自信のなさなどが話された。それに対してまた他のメンバーが、自分の枠組みの中での解釈や対応を話し、それに対して話題提供者が話すというプロセスが繰り返された。その中で話題提供者から「頭では、H男をすべて受け入れた方がいいと思うからこそ、彼の要求を聞いているが、それで成功すればいいが、失敗したら取り

返しがつかないような気がする」とことや「全部受け入れればいいとどうしても思えない何かがある」という発言が出た。他の保育者は受け入れた方がいいと考える根拠を自分の理論の中から述べ、それと共に当事者の失敗・成功感覚への疑問が提示された。話題提供者からは再び、理論としては理解できるが、なぜかH男に対しては動けないこと、そのように受け入れようとしてかかわっても「外れた」と感じるなど話が語られる。ここである保育者から、「失敗・成功・外れたという感覚が、H男との関係の中に強くなっているのではないか」と、当事者の話の内容や言葉使いから気づいた指摘があり、「H男に対して「これで反応変わった？」という風にかかわらなければ、他愛なく一緒にいられる様になり、それによって保育者も子どもも楽になるのではないか」という発言があった。他のメンバーは口々にその発言が一番的確じゃないかと語った。

話題提供者は、最初の頃に抱いていたH男の印象がズレていたと感じたことから、自分の感覚でH男を捉える自信がなく、どうしたらズレないかと考えて、自分で自分を動きにくくしていること。悩んでいるときは、何か考えねばとってしまうことなどが語られ、そこを調整しようという発言になった。

考察

1 保育カンファレンスは実践研究に位置づくか

カンファレンスが実践研究に位置づくか否かを検討するために、事例2のカンファレンスのプロセスで生じたことを以下にまとめる。

① 対象を「保育」という枠から捉え直す。

このカンファレンスは当事者に検討のテーマはあるが、その中身が本人にも分からない状況で始まった。記録に書かれたH男はあくまでテーマの入口であり、「もやもやしている」と表現される保育者自身の枠組みに関する検討がテーマになった。

② 話題提供者の枠組みの検討のプロセス

それぞれの保育者の枠組みから「受け入れる」「楽しそうにしている場面を共有する」など受容に関するそれぞれの保育理論に位置づけて話題提供者に返す。そして話題提供者は「そういうことではない」と具体的な場面に即して話をする。これを繰り返しながら、それぞれの枠組みの違いが明らかになる中で、話題提供者のテーマの本質に迫っていった。そのプロセスの中で話題提供者の「成功」「失敗」「外れた」発言がなされ、その感覚がH男との関係に強くなっているのではないかと指摘される。

↓

③ 話題提供者の認識の枠組みの主体的理解

話題提供者がH男に対して分かりにくいと思ひ、自分自身に対して不信感を抱いてしまう理由は、分かりにくいと感じる子どもに対して保育理論からスタートして保育をしてしまう点にあった。受容しないことに

は保育が始まらないと考えているが、それは受け止めにくいという自分の自然な感情と一致していないという理論と実践の乖離による葛藤とそれによる自分自身への不信感が話題提供者のテーマだった。受け入れなければという理論的なところから始めて、理論的に正しい実践をしようとしているために、頭の中にある理論に合った保育が実現できたか否かが成功失敗の基準になり、その結果が気になって子どもと向き合えないでいた。そういう自分の無意識の枠組みが「自覚できると、そうならないですむ」と述べていた。問題意識が明確になり、素直な気持ちでH男と向き合えるようになった。

①・②のプロセスを経て、③で当事者が主体的に自分の枠組みに気づいたり、見直したり、確認することは、「保育行為に関する判断の根拠を検討する」という保育学の定義（保育学会第45回大会の企画シンポジウムに於ける戸田の提言）に一致する点において保育実践研究の中に位置づくものと考えられる。本人の枠組みの問いなおしを抜きに、アドバイスや観念的な理論を語ることは、事例1のようにプレッシャーになったり、言われたからやってみるというだけで本人の主体的な気づきにはなりにくい。この点においては、②のプロセスで話題提供者が、それぞれのメンバーの枠組みを通して自分の枠組みとそれらとの違いに気づくことが重要である。本園においては、94年度において、それぞれの枠組みの違いが（意図せず）明確になったことが、逆に現時点では②におけるそれぞれの捉えや解釈の違いに気づく上で有効に機能しているものと考えられる。このプロセスがないと、理論と実践は乖離したままであり、そのようなカンファレンスを積み重ねても実践と研究は接点を見いだせないと考える。

2 第三者としての研究者の役割について

事例2のカンファレンスの最後の方でメンバーがそれぞれに同意したり、話題提供者がそれを受けて話している内容を、筆者は初めて「分からない」と感じた。理論だけの話・実践だけの話は第三者にも共有できるが、それぞれのメンバーが実感として感じているもの（保育者いわく「腑に落ちるもの」「身体感覚としての実感」）を同じように感じることは第三者にはできないという保育者と研究者の違いがここで明確になった。それゆえに、その後何度もしつこくこだわって③の部分を出し、ようやく理解できた。理論と乖離しない実践研究には保育者にとって感覚として実感できる部分が不可欠であると考え、その感覚と称されるものを研究の組上に載せ、体系化していく部分にかかわることが実践研究における研究者の役割になると考える。

参考文献

平山園子(1995)「保育カンファレンスの有効性」保育研究16-3 P.18-29.

上越教育大学言語系教育研究系コース(1995)「国語科教育実践場面の研究Ⅷ—国語科教育実践に関する研究カンファレンス(「価値自由」討議)の展開—